

# 陽明文庫本源氏物語の独自性

—「蜻蛉」巻をめぐつて—

野 中 和 孝

## はじめに—定家の書写傾向

藤原定家の晩年は、「不顧老眼」して古典籍書写に専念したとされる。その定家が源氏物語（青表紙証本）の書写になると、

青表紙本は河内本に比して本文をみだりに改めず、伝来のままに尊重する態度をとっている。このことは定家の性格に由来するものと思はれる。と同時にまた父俊成の庭訓・薫陶に負ふところも多いであろう。（波線は筆者）

とした、『源氏物語大成』の池田亀鑑博士の仮説<sup>注1</sup>は、今日でも源氏物語の書写態度としては通用するといえるが、他の古典籍書写になると、そうではないようである。

定家の書写傾向を覆したのは、定家本『俊頼髓脳』の出現である。定家本（冷泉家時雨亭文庫所蔵）の奥書<sup>注2</sup>には、「至于嘉禎三年、存外見及令書留之」（以下略）——とあり、この嘉禎三年（二二三七年）には、すでに定家により書き替えられた本文が成立していた。源俊頼が記した本文は、顕昭本『俊頼髓脳』——その伝本の一つ、静嘉堂文庫本『無名抄

陽明文庫本源氏物語の独自性—「蜻蛉」巻をめぐつて—

俊頼』には、「寿永二年八月二日、於紫金台寺見合了」の奥書があり、寿永二年（一一八三年）に成立している――の本文とされていて、私には「定家は御子左家の俊成以来の歌学の伝統の中で原本を書き換えるという行為に踏み込んだ」<sup>注3</sup>と考えている。

## 一、「蜻蛉」巻について

さて、「蜻蛉」巻は、京に住む匂宮と薫が浮舟の入水自殺（のちに未遂とわかる）を聞き知り、お互いに生前疎遠に扱ったことを悔みながら、その追悼供養を行うという巻である。二人の貴族が一人の女性の死をめぐる、悲しい心情を抑えきれなくて赤裸々に吐露する場面は、かつての物語文学にはめずらしく、貴族男性の涙にむせる描写<sup>注4</sup>などは注目される。

また、「蜻蛉」巻の半ばほどに、法華八講の法要が行われ、中でも「五巻の日」（女人往生が解かれる）が強調され、「いましきものみなりければ、こなたかなたの女房につきて、物みる人もおほかり」とされる場面は、当時の仏教普及のありさまがうかがえ、とりわけ法華経第五巻の人気に、女子が殺到していた時代現象をみるようである。少なくとも作者が強調したかった挿入話であることは間違いないだろう。

本稿は源氏物語「蜻蛉」巻をめぐる、青表紙本として三条西家本（新典社刊影印本、以下「三本」と記す）、別本として陽明文庫本（陽明叢書影印本、以下「陽本」と記す）を使用し、これらの校合により本文異同を確認するものである。加えて、日本中世の古典籍書写の状況を概観してみようと思う。

いま陽本の独自の異同を分類すると次の二通りになる。以下、これに従って考察する。

I 三本にはあるが、陽本に大きく欠落する部分

II 三本にはなく、陽本に新しく補入された部分

二—I①さほうなどあることもし給はずしくあへなくて (二三六) (注5)

まず、陽本に大きく欠落する部分を検討する。なお、傍線部分(筆者による)が陽本の異同(または欠落)箇所である。以下同じ。

浮舟の入水自殺後、なおざりになっていた葬送の儀も、大夫らの「いとしのひてとおもふやうあれはなん」(陽本)の事情により、急拠取り行われることとなった。「このくるまをむかへの山のまへなるのはらにやりて、人もちかうもよせず、このあないしらせたるほうしのかきりしてやかす」「いとほかなくてけふりはてぬ」(同上)では、あまりに急ごしらえの葬送だったことがうかがえる。このことを次のように記す。

ゐ中人ともは、中くかゝる事をことくしくしなし、こといみなとふかくするものなりければ、いとあやしう、  
れいのさほうなどあることもし給はず、けすくしくあへなくてせられぬる事かなとそしりければ、かたへおは  
する人は、ことさらにかくなむ、京の人は、したまふなとぞ、さまざまになんやすからすいひける。 (三本)

ゐ中人は、なか／＼かゝる事をことくしく、こといみなとふかくすれば、いとあやしう、れいのさほうならす  
せられぬることなどそしりければ、かたへおはする人は、かくなむことさらに、きやうの人はなんし給ひたると、  
さまざまにやすからすいひける。 (陽本)

三本では、田舎人はかえって葬送の儀を重々しいものと考え、言忌などをうるさく言うので、決まった作法などするべきことをせずに、下人のするようになつてなくするものだと非難する者もいるし、兄弟などのいる人は、わざとこのように都人はなさるなどと、あれこれと言うとなる。これに対して陽本では、田舎人はかえって葬送の儀を重々しくと

り行い、言忌などをうるさく言うが、決まった作法などしないことを非難する者もいるし、兄弟などのいる人は、このようにわざと都人はなざるなどと、あれこれと言うとなる。

二つの本文を比較すると、三本が田舎人の「けすくしくあへなくてせられぬる事かな」と非難するようすまで言及するのに対して、陽本はそのことに触れないことで、田舎人の葬送の考え方が読み手には分かりやすい表現になっているのである。

## 二―I②さるへきにて時めかしおほさんをは人のそしるへき(八一三)

薫は浮舟母とのやり取りにおいても、気配りを見せている。そこには源氏物語の基底に据えられる「心の闇」<sup>(注6)</sup>(親が子を思う気持ち)を述べながら、「いまよりのちなにごとにつけても、かならずわすれきこえし」をさなき人とも、あまたあなるを、おほやけにつかうまつらむにつけても、かならずうしろみ思へくなん」(陽本)と、浮舟の兄妹の後見まで申し出ている。

みかとも、さばかりのひとのむすめたてまつらすやはある。それにさるへきにて時めかしおほさんをは、人のそしるへきことかは。た、人はたあやしき女、よにふりにたるなともちゐるたくひおほかり。(三本)

みかとに、さばかりの人のむすめたてまつらてやはある。それをさるへき事かは。た、人はたよにさかしき人もあやしきも、よにふりにたるなともちゐるたくひおほかり。(陽本)

三本では、帝にもその程度の娘をさし上げないでもない。それに因縁でご寵愛なされたのなら、人の非難するべきことではない。普通人ならこれは卑しい身分の娘や一度ほかに嫁いだ女を妻とする例は多いとなる。これに対して陽本では、帝にもその程度の娘をさし上げないでもない、そうしない因縁などない、普通人なら賢明な人も卑しい人も、一度

ほかに嫁いだ女を妻とする例は多いとなる。

二つの本文を比較すると、三本が帝の「時めかしおほさん」ことまで言及しているのに対して、陽本はそれをむしる曖昧にすることで、簡明さを取り戻しているのである。

## 二―I③女はうにつきてまいりてもみる人おほかりけり(九三〇)

ここには「蜻蛉」巻で重要な場面となる、法華八講で盛り上がる部分が記される。当該個所の異同は少ないが、当時の法華八講聴聞の絶大な人気のようなすが細かく描写されている<sup>(注し)</sup>。

五巻の日などは、いみしきみものなりければ、こなたかなた、女はうにつきてまいりて、ものみる人おほかりけり。  
(三本)

五巻の日などは、いみしきみのみなりければ、こなたかなたの女はうにつきてものみる人もおほかり。  
(陽本)

三本では、五巻の日などはすばらしい見物なので、あちこちから女房の縁故を頼って集まり、見学する人が多かったそうだとなり、伝聞表現をとっている。これに対して陽本では、五巻の日などはすばらしい出し物とあって、どこそこの女房の縁故を頼って見物する人も多かったとなり、事実確認の表現をとっている。

二つの本文を比較すると、そこには大きな相違はないが、三本の「みもの」のほうに興味本位で見物人が多くたかってくるイメージとなるのに対し、陽本の「ものみ」となると心からの救済(女人往生という)を求めて、とりわけ女性たちが押し掛けてきたようすが強調される。また、伝聞から事実確認の表現にしているのも、場面に緊張感を加えているのである。

二―I④気色にてももりたらはいとわつらはしけなるよなれば (二一九) 注8

浮舟入水後、薫の評判はよくない。明石の中宮方では、薫が宇治で「つほねなどにたちよりたまふへし。ものかたりし給て、夜ふけていてなとし給をりくも侍めれと、れいのめなれたるすちには侍らぬにや」(陽本)という女房たちの批判が出はじめている。中宮も、「いとみくるしき御さまを、思しらむこそおかしけれ。いかてか、るくせやめ奉てすつらむ。はつかしや」(同上)と薫を批判している。

こうしたなか、当の薫にも、女一の宮に対する好色の思いは募るばかりで、「芹川の大將」の物語(散佚)の女一の宮のように、自分に思いを掛けてくだされば「いとよくおもひよせらるかし」(同上)と思うばかりである。その時の心境を次のように述懐している。

萩のはにつゆふきむすぶ秋風もゆふへそわきて身にはしみけるとかきても、そへまほしくおほせと、「さやうなる露はかりの気色にてももりたらは、いとわつらはしけなるよなれば、はかなきこともえほのめかしいつまし。…」

(三本)

おきのはにつゆふきむすぶ秋風もゆふへそわきて身にはしみけるとかきても、そへまほしくおほせと、「なかくさやうなる露はかりのけしきにても、ほのめかしいつまし。…」

(陽本)

三本では、絵の脇に一首を添えたいとお思いになるが、「そんな悲しむようすを、ほんの少しでも洩れたら、ひどく面倒になる世の中だから、ちよつとしたこともほのめかすこともできない…」となる。これに対して陽本では、絵の脇に一首を添えたいとお思いになるが、「そんなことをすること、かえって悲しむようすをわづかにももらすことばできない…」となる。

二つの本文を比較すると、三本でいう「いとわつらはしけなるよ」とは、読み手には薫への女房や中宮の批判を指し

ていると领会させる。その箇所が陽本ではないが、むしろその事に触れないことで、やはり簡明さを印象づける表現になっている。さらにはこの後に語られる女一の宮の降嫁（「ときのみかどの御むすめを給」）とのつながりを示唆しているのである。

### 三、陽本の書写方針（一）

ここで『大成』を参考にして、Iの異同箇所が他本ではどのようになっているのか確認しておく。

I① 「あることともし給はすけすくしくあへなくて」は陽本のみナシ。

I② 「にて時めかしおほさんをは人のそしるへき」は陽本のみナシ。

I③ 「まいりて：けり」は陽本のみナシ。

I④ 「もりたらいはいとわつらはしけなるよなれははかなきこともえ」は陽本のみナシ。（注9）

このように陽本では大きな異同箇所が他の青表紙本（『大成』では大島本はじめ四本）、河内本（東山御文庫本の御物本はじめ六本）、他の別本（高松宮家本はじめ五本）には確認できないから、陽本の独自本文であることは明白である。すなわち、陽本側の書写方針（注10）で書き替えられたということになる。

それではどのような意図のもとに書き替えられたのであろうか。これまでの考察では、I①によると、読み手のことを考えて分かりやすく表現しているのであり、I②によると、むしろ曖昧に表現することで内容を簡明に示しているのであり、I③によると、時代的な要請によって、とりわけ「五巻の日」を強調しようとしているのであり、I④によると、物語の展開上、その流れを見えやすくしているののである。

#### 四―II ①形容詞・形容動詞・副詞の補入

次に、陽本に新しく補入された部分を検討する。なお、本文は陽本で示し、傍線部分（筆者による）がその補入箇所である。

まず、会話文であれば話し手の、地の文であれば語り手の感情表現を豊かにする形容詞・形容動詞・副詞が補入された例を多く見いだす。次に主なものを挙げる<sup>（註11）</sup>。

ものへわたらせ給はむ事いとちかうなれと（二二七）

思ひもあへ給はぬさまにてうせ給にたればあさましいみしといふ（九一）

おはしますをりもありかたけに侍れはとのゐなにもそのこととなくて（三八三）

かゝる事とものうたてあるを人はいかゝみむ（五七二）

「あさましかは。こよひ返らまじやは」といみしくなむ（七三八）

わらひたるさままことにあい行つきたり（九八一）

ひめ君あまたまいりたる（二二五八）

このうち、（三八三）には、薫が病氣療養中の母（女三の宮）を石山寺に見舞っていると、浮舟入水の知らせを聞いた匂宮の落胆を見舞うこととなり、自らを述懐する。官位も上がった薫が暇もない匂宮に「ありかたけに」お仕えすることもなく、過ごしていたようすを、あえて強調しているのである。

また、（五七二）には、匂宮が浮舟入水のようにすを侍従から聞き出すと、たくさんの贈物をつかわしになるが、侍従はそれを不快に思ったのであろうか、「うたて」あるとして当惑気味である。その侍従の心情を汲みとつての「うたて」の表現となるのである。

#### 四―II②長文の補入

また、陽本には長文の補入を多く見いだす。次にそれを挙げる。なお、「」は傍書による補入である。

いみしう物おもひつらん事も「しらねは身をなけ給へらんとも」思よらす（二六三）

うつし心なきさまにてものおほえ給はすいかなる御もの、けにかあらむと（三二七）

はしたなけれとわれかく物おもふらむとかならずしもいかてか心えん（三五九）

御ふみともをやり給つ、やくとうししない給しなるとなとてめをたてまつらすなりにけん（五五五）

た、人はたよにさかしき人もあやしきもよにふりにたるなともちゐたる（八一五）

人しれぬすちにはかけても人にけしきみせたまはず（九三二）

わかば、宮もこのゑたてまつりたる宮もとり給へき人かは（二四四六）

このうち、（一六三）には、浮舟入水の知らせを受けた母君が宇治にやってきて、付きの女房達の説明を聞こうとするが、一旦は「ものおもひつらむ」としただけだったが、この後の伊勢物語第六段を踏まえた鬼の話につながることに気づいたのであろう。「身をなけ給へらん」ことを傍書に補入したのである。

また、（五五五）には、都に出た侍従が匂宮に浮舟入水のようにすを説明するが、その異変に気づいていながら、お手紙を焼いてしまわれたようにすに注意が向かなかつたのかと後悔している。実際には破り捨てて焼いたことになっていたことに文脈を合わせて、「やり給つ、やく」と改めている。いずれも、文脈の整合性を意識しての補入を行っているのである。

#### 四―II③敬語の補入

さらには、陽本には敬語の補入を多く見いだす。次にそれを挙げる。なお、上段Ⅱ三本／下段Ⅱ陽本である。

いとあさましくおほしもあへぬさまにてうせ給にたれば／いとあさましくおもひもあへ給はぬさまにてうせ給にたれば（九一）

いま、いりの心しらぬやあるととへは／心もしらぬいま、いりやあるととひ給へは（一七二）

いかなる人かゐてかくしけむなとそおほしよせんかし／いかなる人かゐてかくしきこえけんなどそおほしよらむかし（二五二）

御ともにくしてうせたる人やある／御ともにくしてうせ給たる人やある（六一六）

しつ心なくてまもりたちたるほとに／しつ心なくてまもりたち給へるに（九九九）

いにしへの御ことすこしきこえつゝ、のこりたるゑみ給／いにしへの御事なときこえ給てのこりたるゑともみたまへる（二〇八一）

にはかにむかへ給はんとて／にはかにむかへたてまつらんとて（二一五三）

このうち、（九一）には、入水したときの浮舟のようすに思いたらないと語る侍従の言葉であるが、「おもいあふ」の主体は浮舟であるから、敬語の付き方は陽本の方が合っているのである。

また、（二五二）には、浮舟の死骸もなく葬送の儀を行った侍従たちが、匂宮以外の誰かが連れ去ったのだらうとお考えになるかもと恐れる場面である。読み手が思いつくのは薫しきくないのであるから、「かくしけむ」よりも「かくしきこえむ」として、匂宮に対する敬意を表している陽本の方が、むしろ正しいのである。

さらに、（二一五三）には、浮舟のもとに通っている匂宮をさし置き、薫が急に都と連れ出そうとしている場面だが、

「むかへる」の主体は薫であり、匂宮と関係のできている浮舟に敬意を添える陽本の方が合っているのである。

#### 四―Ⅱ④和歌の異同

最後に、陽本に和歌の異同があるかを確認しておく。源氏物語における和歌は、物語の展開上に話を集約させる役割を課せられている。その意味では和歌の異同はできるかぎり少なく抑えることを予想させるからである。

陽本文文が多く書き替えを行っている中で、和歌には異同があるのであるか。「蜻蛉」巻の中には、合計十一首の和歌が挿入されているが、そのなかで三本との異同があるのは、次の三首（第一首、第三首、第八首）である。陽本文文で示す。

しのひねやきみもなくらむはかもなきしてのたをさにこゝろかよは、（四五三、三本「かひもなき」）

われも又うきふるさとにあればはたれやとり木のかけをしのはむ（七二九、三本「を」）

はなといふなこそあたなれおみなへしなへてのつゆにみたれやはする（二三六一、三本「へは」）

第一首はほととぎすの鳴く頃に、薫と匂宮が贈答歌を交わした場面だが、三本の「かひもなき」より陽本の「はかもなき」の方が、心に沁みる印象を与える。第二首は浮舟の「うき水のちぎり」を思い出しながら薫が詠んだ歌だが、三本の「を」では意味が通りにくく、陽本の「に」の方が自然に了解される。第三首は平穩を取り戻したかに見える薫が女房と唱和歌を交わしている場面だが、三本の「花といへはなこそあたなれ」の方よりも、陽本の「はなといふなこそあたなれ」の方が、女郎花の生態を肯定的に言っていて、いたわりの心があらわれている。

## 五、陽本の書写方針(2)

ここで『大成』を参考にして、Ⅱの異同箇所が他本ではどのようになっていたのか確認しておく。

Ⅱ①(二八)(九一)(三八三)(五七二)(九八一)(二二五八)は陽本のみ。(七三八)は他に別本の一本、河内本の一本。

Ⅱ②(三一七)(五五五)は陽本のみ。(一六三)(三五九)(八一五)(九三二)は他に別本の一本。(一四四六)は他に別本の二本、河内本の一本。

Ⅱ③(九一)(二七二)(二五二)(二〇八一)(一一五三)は陽本のみ。(六一六)は他に別本の二本。(九九九)は他に青表紙本の一本。

Ⅱ④(四五三)は他に別本の二本、河内本に一本。(七二九)(一三六一)は他に別本の二本。(注12)

このように①～④のいずれの異同でも、陽本の独自性が保たれているといえる。すなわち、陽本側の書写方針で書き替えられたということになる。(なお、②の(二四四六)、④の三首ともに高松宮家本との異同を同じくするが、これはこの本と陽本の本文との交流の可能性がある。)

先に書写方針(1)を明らかにしたが、ここで新たにわかったことがある。それはⅡ①によると、感情表現を豊かにしているのであり、Ⅱ②によると、物語の内容を豊かにするために文脈の整合性を意識しているのであり、Ⅱ③によると、敬語の付き方を正しく合わせているのである。さらには、Ⅱ④によると、ときには和歌の詞を替えることで、伝える心を自然に表現しているのである。

## おわりに

陽本には次のような大きな異同がある。

I 三本にはあるが、陽本に大きく欠落する部分

II 三本にはなく、陽本に新しく補入された部分

Iでは読み手にわかりやすいように簡明に表現し、さらには物語の展開上に流れを見えやすくしたり、時には書き手の意図を明確にするところがあったのである。一方、IIではさらに物語の内面に入り込み、文脈の整合性や人物の心情を推し量ることのできるような表現をしていることに気づく。それは単に「論理的」というよりも、読み手に物語の展開をわかりやすく、しかも深く読みとれるように意識しているのである。

このように陽本は本文の書き替えを意図的に行っているが、先に触れた『俊頼髓脳』で見いだされた、定家による本文書き替えの事実<sup>(註1)</sup>を知っていたかというところであろう。それは定家の場合は御子左家という「歌の家」内での秘密であり、当主（とその管理下）以外には知りえないことであつたと思うし、また、少なくとも他の流派の人々には知らされることはなかつたと言わざるをえない。

とはいいいながら、源氏物語の書写活動において、青表紙本側（定家側）からの本文書き替えではなくて、別本の陽本側からの本文書き替えの事実が確認された。これは鎌倉期にかけての古典籍書写の活動時代において、いくつかのグループの中で、「本文をみだりに改めず、伝来のままに尊重する態度」から逸脱する行為が意識され始めていたことを明かしているといえる。

注記

- (1) 池田亀鑑著「源氏物語諸本の研究」(『源氏物語大成』第七巻「研究篇」所収、初版一九五六年十二月五日発行)にすでに言及する。なお、この著書は以下「大成」と記す。
- (2) 冷泉家時雨亭叢書「俊頼髓脳」の解題(鈴木徳男執筆)によると、「国会本との著しい異同から知られることとして、国会本をもって定家の享受した『俊頼髓脳』とみなすことがとっていてできない」「このたび出現した該本によれば、顕昭本との異同が少なくなり、その距離が縮まっていること、なおかつ残る相違の顕在化など」とする。
- (3) 拙稿「六条家歌学の形成と成長」(『日本文藝学』第四十九号所収、二〇一三年三月発行)参照。なお、『俊頼髓脳』の伝本の調査により、定家本と顕昭本があり、顕昭本が原本に近いことを早くに論じたものには、橋本不美男、赤瀬知子両氏の論がある。
- (4) 例えは、兵藤裕巳は「平安時代の「物語」と物語文学」(『岩波講座 文学3 物語から小説へ』所収、二〇〇二年発行)の中で、「作中人物になりかわる歌と語りには、救われない女たちの日々の鬱念が投影されるだろう。そして昔という時間を、私的な今(生存)と向きあう時間に組みかえる彼女たちは、所詮凡庸な物語でしかない昔物語のパターンを逸脱してしまう。女性たちの『ものがたり』のいなみが、同時代の男性的な知の水準を逸脱して、近代のノヴェルにも見まがう小説世界へと突入してゆく」とする。
- (5) (二三六)とは三本(新典社刊)の頁数と行数を表す。以下同じ。
- (6) 拙稿「現代社会に巣くう『心の闇』―古典和歌に学ぶ―『活水日文』第四五号所収、二〇〇四年一月発行)参照。
- (7) 例えは、『枕草子』(能因本、四二段)では、「こしら川といふ所は、こ一条の大將殿の御家。それにてかたちちめけちちん八講し給に、いみしくめてたき事にて、世中の人のあつまり行てきく。」「六月十日にて、あつき事よにしらぬほとなり。」「あさ、のかうしせいはん、かうさのうへもひかりみちたる心ちして、いみしくそあるや。…権中納言、「や、まかりぬるもよし」とてうちわらひ給へるそめてたき。それもみ、にもとまらず、あつきにまとひ出て、人して、「『せんの中にはいらせ給はぬやうあらし』と聞えかけてかへり出にき。」と、寛和二年(九八六)六月十八日から二十一日までに行われた法華八講を記すが、権中納言(六月二十三日、花山天皇の突然の出家に供した、藤原伊尹)一条撰政の五男藤原義懐)が戯れに引用したのは、法華経方便品(妙法蓮華経第二)の故事であった。とりわけ、「蜻蛉」巻のように五巻(同第十二)を引用するのは当時はめずらしいし、また、陽本のように伝聞で語らないのは説得力を増すことになる。

(8) ここに示した以外に、異同の大きい箇所を示すと、①「ことつくることなくてときかたまかりたらんをもの、きこえ侍らはおほしあはすることなどや侍らむさてはかに人のうせ給へらむところはろんなうさはかしう人しけく侍らむを(六八―七二)、②いともくゆ、しき身をのみおもひ給へしつみていと、ものもおもひ給へられすほれ侍てなむうつふしく侍(七三―七四二)、③はかなきさまにてそおはすらんと思ひけるを京になとむかへ給てのちめいほくありてなとしらせんとおもひけるほどにか、れはいまはかくさんもあひなくでありしさまなくくかたる(八二―八三三)、④たれならんと心さはきてをのかさまみらむこともしらすのこよりた、きにけれはふとたちざりてたれともみえしすきくしきやうなりとおもひてかくれ給ひぬ(一〇〇五―同九)、⑤このおもとはいみしきわさかなみき丁をさへあらはにひきなきけるよ左大殿の君たちならんうとき人はたこ、まてくへきにもあらずもの、ここえあらはたれかさうしあけたりしとかならずいてきなん(同九―一〇一三)、など。なお、右の本文は三本で示し、傍線部分が陽本の異同(または欠落)箇所である。

(9) (注8)の例文で見ると、①「もの、きこえ侍らは」「ろんなう」はともに陽本のみナシ、②「ものもおもひ給へられすほれ侍てなむうつふしく侍」は陽本のみナシ、③「思ひけるを京になとむかへ給てのちめいほくありてなとしらせんと」は陽本のみナシ、④「たちざりてたれともみえしすきくしきやうなりとおもひて」は陽本のみナシ、⑤「ならんうとき人はたこ、まてくへきにもあらず」は陽本のみナシ。

(10) 伊井春樹は陽明文庫本文と大島本文とを比較し、「陽明本は表現が豊かなせいもあるが、文脈の流れからしても論理的であるのに対し、大島本はどうしても表現不足という印象を否認ない」(10頁下段)とした(『陽明文庫本源氏物語の方法』、『國語國文』第六十二卷第二号所収、一九九三年一月発行)。これは「古態を保持していながらも中世的な手がかかり加えられている」「鎌倉期古写の別本とされる巻」(具体的には桐壺・帚木・若紫及び須磨の巻を対象とした)を取り上げて考察した結論である。今回考察した「蜻蛉」巻も鎌倉期古写の別本とされる。伊井は「これは何らかの統計によっているのではなく、良本を読み比べてほんの一部の巻々の例にしかすぎない」(12頁上段)と断っている。

(11) これ以外の例を次に示す。①おもふになんいみしうこかる、むねのさむる心ちしける(三三三―四)、②心やすくをかしと思侍りし人(三九七)、③としころあなちにあはれとおもひそめにし(七〇四)、④かしらつきともさまくにおかしとみわたし給て(一二三五―四)。なお、右の本文は陽本で示し、傍線部分はその補入箇所である。

- (12) (注11) の例文で見ると、①「いみしう」④「さまくに」は他に別本の一本、②「をかし」③「あなちに」は陽本のみ。
- (13) 冷泉家時雨亭文庫所蔵の定家本『俊頼髓脳』(定家自筆本)が公開されたことで、この本が原本の書写ではないことが明らかとなり、さらに、「本文の書き替えの事実」がすべてにわたり確認できないことがわかったが、「本文をみだりに改めず、伝来のままに尊重する」という父俊成の庭訓を継承する「歌の家」にとつて、それを「逸脱する行為」が定家によりなされた事実は拭いきれないことと思う。